

有關日語「變化他動詞句」之探討

蘇文郎*

摘要

本論文的目的在探討日語變化他動詞句的句子結構及其用法、意義特徵，主要以述語是他動詞的下列

- 1) XがYヲZ (名詞) ニ .他動詞
- 2) XがYヲZ (名詞) ニ スル
- 3) XがYヲZ (形容詞、形容動詞連用形) スル
- 4) Xが[補文] ヨウ ニスル

四種類型的句子為探討對象，並就變化表達句中的 1) 結果語是否為必須成分 2) 對象語和結果語間的格關係的對立 3) 動詞和必須補語結合的順序等問題加以檢證。並發現日語的變化他動詞句在句子內涵上表達多種不同的意義，和其他的表達法如「引用表達法」、「認知表達法」亦具有密切的連續性。

關鍵詞：他動詞、變化句、必須補語、對象、結果、補語子句

変化他動詞文についての研究

蘇文郎*

要旨

本稿は日本語の変化他動詞文の諸相について記述的に考察することを目的とする。具体的に

- 1) XがYヲZ (名詞) ニ 変化他動詞.
- 2) XがYヲZ (名詞) ニ スル
- 3) XがYヲZ (形容詞、形容動詞連用形) スル
- 4) Xが[補文] ヨウニ スル

の四つの文型を取りあげ、それらの構文形式と意味用法の特徴を詳細に検討する。

また変化他動詞文における1) 結果語は必須成分か、2) 対象と結果の意味役割の対立、3) 動詞と必須成分の結び付きの順序といった問題をも検証する。

そして変化他動詞文と連続性を持つ“引用表現”、“認識表現”、“意義づけ表現”との関連性についても言及する。

キーワード：他動詞 必須補語 変化文 対象 結果 補文

A Study of Transitive Verbs in Japanese Change-of-state Sentences

Soo Wen-Lang*

Abstract

The aim of this paper is to provide a descriptive study of transitive verbs change-of-state sentences from the viewpoints of syntax and semantics which consist of following patterns;

- 1) X ga Y o Z (noun) ni Vt.
- 2) X ga Y o Z (noun) ni suru
- 3) X ga Y o Z (adj.) ni/ku suru
- 4) X ga [sentential complement] youni suru.

The discussions include 1) whether the resort complement is essential elements or not, 2) the semantic construct between the Theme and Goal, 3) the order between Theme and Goal.

In addition the paper attempts to clarify the relationship between the “Quotation expression,” “cognitive expression” and “Realization expression” which are related to transitive verbs change-of-state sentence.

Key words : transitive verb, change-of state sentence, essential element, Theme, Goal, sentential complement

変化他動詞文についての研究

蘇文郎

1. はじめに

1.1 本稿の目的と考察範囲

変化表現の類には主として述語に変化自動詞が使われるものと、変化他動詞が使われるものがある。変化自動詞文については筆者は蘇（2001）（2002a）（2002b）（2002c）で（Ⅰ）XがY（名詞）ニ/トV（変化自動詞）（Ⅱ）XがY（形容詞、形容動詞連用形）ク/ニナル（Ⅲ）〔補文〕コト/ヨウニナル（Ⅳ）～化スル 形式の構文の考察を行ってその用法と意味特徴の一端を明らかにした。本稿では変化表現の研究の一環として、変化他動詞文を取りあげて、論じることにする。

本稿で取りあげる変化他動詞文は意味的には、あるもの「仕手」が他のあるもの「対象」に働きかけ、あるいは、作用して、その結果、対象がある状態から別の状態になるということを表すものである。そして統語上、変化他動詞文を構成する必須成分として、変化自動詞文と対照的に三つの要素が必要とされる。まず、第一は、変化作用を引き起こす〈仕手〉、第二は変化作用をこうむった〈対象〉、第三は変化の終わりの〈結果〉や〈状態〉である。構文上、次のような統語的または意味的特徴を呈している。

| | | | | | | |
|------|----|---|----|---|-------------|--------|
| 統語上： | ガ格 | + | ヲ格 | + | ニ格 | + 述語動詞 |
| | ↓ | | ↓ | | 形容詞・形容動詞連用形 | ↓ |
| | | | | ↓ | | |
| 意味上： | 仕手 | | 対象 | | 結果 | 変化作用 |

1.2 変化他動詞についての定義

他動詞には主体の動きだけを表すものと、主体の動きに加えて、客体の変化をも含意するものがある。例えば

- (1) 僕は昨日友達と酒を飲んだ。
- (2) 店の女の子は一つにくくった傘を二つに離し、あらためてもう一枚の番号札をくれました。(「翳った」)

例文(1)の「飲む」は動作主体「僕」がどのような行為をしたかという側面だけを表し、その動きの影響を受けて、対象「酒」がどのような変化をしたかということを示さない。すなわち、主体が対象にどのような動きをするかという、その動きの過程の側面だけをとらえる他動詞である。一方、例文(2)は、主体「店の女の子」の引き起こした動きがどのようなものであるかということと共に、その動きの影響を受けて、対象「一つにくくった傘」が「二つに離れた」状態へ変化するという意味、対象の変化の側面の意味も含まれている。本稿では主に後者のような意味特徴、すなわち主体の働きかけと対象の変化の両方の意味を持つ他動詞を取り扱うことにする。¹以下では、これらの動詞を「変化他動詞」と呼ぶことにする。対象の変化後の状態を表す結果語を取りうる変化他動詞には、他に例えば「上げる、温める、編む、描く、選ぶ、折る、変える、書く、刻む、起用する、切る、砕く、組む、する、下げる、推薦する、する、育てる、染める、炊く、千切る、縮める、作る、溶かす、縫う、伸ばす、増やす、減らす、彫る、まとめる、割る…」などが挙げられる。例文を少し挙げておく。

- (3) 西村たか子は手のコーヒー茶碗を煙草に代えた。(「美しき」下)
- (4) 彼女は君を会員に推薦したのだよ。(「翳った」)
- (5) きみをどんなにも重役夫人にしてあげるよ。(「翳った」)
- (6) 競争は人間を利己的にする。(「とんでもない」)

¹ 変化他動詞には対象をある位置から別の位置へ移動させる。すなわち位置的な変化を起こさせる(例えば、入れる、出す、おろす、のせる、移す…など)のようないわゆる位置的变化を表すものもあるが、この種のタイプの動詞は本稿では触れないことにする。なお複合動詞も考察の対象外とする。

(7) 人手を節約するだけの医療機械化は看護婦にとってはむしろ看護の本質を貧しくするだけである。(「とんでもない」)

(8) みんなに言ってやるわ。このアパートにいられないようにするわ。(「美しき」上)

上掲した例文に基いて変化他動詞がとる構文形式は主として次のようなものにまとめられる。

(i) XガYヲZ(名詞)ニ変化他動詞

(ii) XガYヲZ(名詞)ニスル

(iii) XガYヲZ(形容詞・形容動詞連用形)ク/ニスル

(iv) Xガ〔補文〕ヨウニスル

すべての変化他動詞はその表す文脈的意味によって以上の諸形式のいずれかの文型を取る。もちろん、ここに挙げる格以外に、時間や、共同動作者、人数、原因、理由、比較など、種々の条件が格となって、随意成分としてかかわり、文を複雑にしているが、変化他動詞の基本的意味を規定する要素とはなっていないので、ここでは取り扱わないことにする。

2. 先行研究と変化他動詞についての基本事項

2. 1 変化他動詞とその構文についての諸説

日本語の変化他動詞文の構文について、これまで多くの研究者によって様々な立場から研究が行われてきており、大きな成果をあげている。本稿では、諸説をいちいちとりあげて論じることはできないが、本稿が取り扱う変化他動詞に含意される「働きかけ」と「変化」との関連で諸説の中で特に注目されるべき主張を二、三取りあげて概観する。

まず、宮島(1972)は

同じ他動詞でも対応する自動詞があるものと、ないものとは意味的に差がある。すなわち前者は対象に対するはたらきかけと対象の変化とを後者は単にはた

らきかけをあらわす。 P. 684

と述べ、相対他動詞（自他対応の他動詞）と絶対他動詞の意味の差に言及するが、「変化」についての明示的な記述はない。ここで分かったのは自他対応における「はたらきかけ」の決定的な意味的特徴は対象が変化するということである。では「変化」とは如何なるものであるか。仁田（1983）（2002）では次のようにはっきりした定義を下している。

まとも受動を形成する他動詞の中には、対象への主体の働きかけが対象の状態変化を引き起こし、それを対象に残す、といったあり方をとるものと、主体は対象に働きかけるが、対象は必ずしもその働きかけによって、状態を変化させることを必要としないものがある。 P. 127

つまり「状態変化が対象に残る」ことを「変化」とするのである。そして「対象」と「変化」の関係で「殴ル」のように動きの展開過程の局面だけを持ち、対象の状態変化を引き起こすことを必要としない他動詞を〈対象非変化動詞〉、「切り裂ク」のように動きの展開過程の局面と動きの結果の局面を持ち、対象の状態変化を引き起こす他動詞を〈対象変化他動詞〉と名づけて区別している。²なお〈対象変化他動詞〉は結果の副詞を取りうるのに対して〈対象非変化他動詞〉は結果の副詞を取りえないと指摘している。以上で分かったことは宮島は他動詞を語レベルで捉えているのに対して仁田は文レベルで捉えていることである。

一方、寺村（1982）は「変える」類の動詞、つまり「働きかけ」と「変化」の複合の動詞を述語とする構文をコトの一つの類型として立てている。そしてこの種の動詞が持つ意味と構文特徴について次のように述べている。

² <対象非変化動詞>と<対象変化他動詞>の名称は仁田（2002）によるものである。

あるもの (X) が他のもの (Y) に働きかけ、作用して、その結果、Y がある状態性質 (Z) を帯びるようになる、あるいは身分、資格 (Z) をもつに至るという型の表現である。Y は X に対しては「受け手」、Z は先の「ナル・変ワル」の表現と同じく結果を表わす補語である。この種の動詞にとっては両方とも必須補語である。

P. 124

先掲した宮島 (1972)・仁田 (1983) と違って、形態的対応に加えて、格関係も視野に入れて、この後の変化他動詞は変化後の結果を必須補語としてとると規定しているのが特徴である。また変化「結果」の範囲をただ対象の状態、性質の変化だけではなく、「ある身分、資格をもつに至る」というように身分、資格の変化まで拡大しているのが他の諸説に見られないとらえ方である。

ただし、変化の結果を表す成分が必須であるかどうかの認定のしかたには先行研究を見る限り、まだ色々な問題が残っていることは否めない。もともと結果語が変化他動詞にとって必須成分なのか付加成分なのかについての認定またその取り扱い方には諸説があり、研究者の間はかなり考え方の違いが見られる。周知の通り、動詞述語にとって、その成分が必須か否かは文脈との関連もあって、述語の種類のみではなかなか一般化できない。しかし、必須成分の設置は変化他動詞文の意味用法の特徴を考えるうえで大変重要な意味を持つことである。

2. 2 結果語についての様々なとらえ方と本稿の立場

上述した諸説では結果語は変化構文のひとつの成分として捉えられているが、補文から来たものと主張する説もある。その代表的なものを二、三紹介しておこう。奥津 (1977) と城田 (1993) である。

奥津 (1977) は変化動詞文の内部構造、特に結果を表す部分の範疇について

- (1) 武ハ〔武ガ軍人ダ〕ナッタ→武ハ軍人ニ/トナッタ

(2) 父ハ武ヲ〔武ガ軍人ダ〕シタ→父ハ武ヲ軍人ニ/トシタ
 結果語の「ニ」を「ダ」と考えて、そして(1)(2)
 に示すように「ダ」型文を補文とする埋めこみ構造と
 考えたい P. 89～99

と述べている。また

名詞+ニの形だけでなく、形容詞、形容動詞も結果語
 になるし、さらに動詞も「ヨウニ」をとって結果語と
 なる。 P. 90～93

というように、すべての型の文が変化動詞の結果語となると強調している。

城田(1993)は

娘ヲピアニストニ/上品ニ育テタ
 花子ハピアニストニ/上品ニナッタ
 水ガ氷ニカワル
 水ヲ氷ニカエル P. 76～77

という例をあげて文中のニ格に立つ名詞は「結果的にはガ/ヲ格にたつものが事実ないし想定において転化するものを示す」とし、「文論上では単に述語的内容を持って一定の動詞の意味を補充するように働く」と述べ、このようなかたちを「述語転化補語」と呼んでいる。そして「述語転化補語形は形容詞や状詞の連用形にも見出される」と付け加えて説明している。結果語についてのそのとらえ方はかなり奥津(1977)に近いと言えよう。

これらの結果語を述語動詞に対していかなる統語的關係にあるものと位置づけるかであるが、蘇(1997)と蘇(2001)の考察で分かったように従来の扱いは、大体、形の上で名詞+格助詞は補語(あるいは、補充語、補充成分)と、形容詞、形容動詞の連用形及び副詞は「修飾語」(あるいは連用修飾語、連用修飾成分)と呼んで、線を引いて区別するのが主流である。

一方、益岡（1987）は変化動詞が必須成分として要求する結果語を形の上から区別せず、一括して「補足語」と呼び、名詞句の形をとる補足語を「項」、形容詞、形容動詞の連用形のもを「連用語」と呼び、随意成分の副詞的付加語と区別している。また早津（1995）のように、全く形の区別をせず、述語にとって必須成分として要求されるものを「必須補語」、非必須成分を「副詞的な補語」と呼び分けているものもある。早津は副詞的な補語には、副詞だけでなく、動詞を修飾する「ニ」格名詞、形容詞や形容動詞の連用形なども入れている。そして職能的に副詞的な補語を、働きかけの結果の状態を修飾する補語と、働きかけの過程の様態を修飾する補語と二分している。益岡、早津のように述語にとっての必須成分を形の上から区別せず、一括して「補足語」や「補語」とする傾向が最近目立つようになってきたことは注目されるべきである。

本稿も変化他動詞文の構文特徴と意味用法を考えるうえで、動詞の下位分類別による必須成分の設定が大変重要かつ意義を持つことと考える。これはまた日本語教育そして中国語との対応関係の問題を考える時に有益かつ有効な方法と思われる。以下本稿で考察する四つの変化他動詞文においては結果語が必須成分であることを前提にして考察を進めていく。

なお本稿では益岡の用語の一部を採り、変化他動詞文における必須成分を一括して「補足語」と呼ぶ。そしてその下位類として名詞句の形をとるものを「補語」、形容詞、形容動詞の連用形の形をとるものを「連用語」、副次的成分を「付加語」と呼ぶことにする。

3. 各種の変化他動詞文の意味と用法

³詳しくは蘇（1997、P42～47）、蘇（2001、P13～18）を参照されたい

3. 1 分析

以下では、変化他動詞がとる (i) ~ (iv) 四つの形式の構文それぞれについて、その意味用法の特徴を考察していく。

3. 1. 1 XガYヲZ(名詞)ニV(スル以外の変化他動詞)

- (9) 大量のカリフォルニア人がこのいわゆる黄金の州で自分の持ち物をカネに変えようとしたあげく----(「恐る」)
- (10) 英語は英語として理解すべきである。いちいち英語を日本語になおす必要はないとネイティブスピーカーや英語の先生は言う(「東大生」)
- (11) フランス屈指の哲学者・文化人になる人物たちが地方で先生になって、高校生を教える。それがフランス全体の教育水準を高いものに保っている要因の一つだと思います。(「東大生」)
- (12) 柱や梁や壁が自然の木肌を生かしたオイルステイン仕あげで室内を落ち着いた渋みある色調に統一している。(「翳った」)
- (13) 大安の日を結婚式の日に選ぶ。(「基本」)
- (14) 彼女を偽装した事実の証人に仕立てた。(「美しき」下)
- (15) 記事によれば、我が国の捜査局が指紋の復元に成功した。

.....

だが、この新手法を採用すれば、容疑者の不完全な指紋を完全指紋に復元できるのではあるまいか。(「翳った」)

上掲した例から分かるように、いずれの文も主体が対象に働きかけ、作用して、対象がある状態、あるいは資格、地位を帯びるに至るという意味特徴を持っている。そして対象を表す補語にヲが使われ、変化の結果の状態を表す補語にニが使われているという統語的特徴をもったものとしてまとめることができる。これらの文中では結果補足語は必須成分で、その生起をあらかじめ選択的に指定され

た成分である。一方、上の例文に使われる動詞「変える、保つ、選ぶ…」は下記のような文脈では結果補足語を指定しないのが普通である。

歳月が彼の人柄を変えた / 一冊の本が世界を変えた
 健康を保つ / 平和を保つ
 代表的作品を選ぶ / いい下宿を選ぶ

動詞そのものの基本的意味には変動はないが、その叙述事項の意味内容によって、とるべき格に違いが現れてくる。これは変化他動詞に限らず、動詞全体について言えることである。すなわち、一つの動詞が必ずしも唯一の格体制に終始するわけではない。変化他動詞には、このような多義的で広い意味領域を持つものが多く、格支配の実態を複雑なものとしているのである。

3. 1. 2 意味役割の対立と語用条件

他動詞文における必須補語の名詞の格には意味役割と形という二つの側面がある。この格の意味と形式は一対一に対応しているわけではない。このタイプの変化他動詞文はその意味的特徴によって次のように三つのカテゴリーに下位分類できる。

| 意味的特徴 | 動詞グループ |
|-----------------|-------------------------------------------------------------|
| ↓ | ↓ |
| A 作り出し活動 | (i) 造る、拵える、炊く、焼く、縫う、編む、ぬう、彫る… (ii) 書く、つづる、描く、詠む、まとめる、撮る… |
| B 対象改変表現 | 変える、なおす、訂正する、翻訳する、切る、折る、割る、伸ばす、減らす、増やす、上げる… |
| C 社会的地位 状態変化 | 選ぶ、起用する、推薦する、抜擢する、雇う… |

雪景色を俳句に詠む

のような例文から分かるようにニ格名詞の「写真」「文章」「俳句」はやはり上記の(i)類の造り出し表現と同様「生産物」「作品」であると見てもよかろう。もっともニ格に立つ名詞が場所的にとらえられ、「～ヲ～ニ他動詞」文型をとる時、行為、動作の表出場所の意となる場合もある。例えば、

講義をノートにとる

この文型ではヲ格とニ格の位置の入れ替えができない。

ただし、ヲ格名詞の語彙的意味の性格からこれらの文は

×富士山{で/から}写真を撮る

×旅行の感想{で/から}文章をまとめる

×雪景色{で/から}俳句を詠む

[Yデ/カラ(材料)Zヲ]に言い換えることができない。強いて(i)類動詞との類似性を考えれば、

富士山の写真を撮る

木の仏像を彫る

旅行の感想の文章をまとめる

毛糸のセーターを編む

雪景色の俳句を詠む

米のご飯を炊く

のように言い換えが両方とも成立するのである。ただし、発想も二つの名詞格の文中における文法関係もまったく変わってしまうことになる。

ではB類の対象改変動詞に移ろう。この動詞構文も「変える」に代表されるように動作主体の運動が、ある対象に変化をもたらすといったことがらを表す。そして形態的には変化する前の対象をヲ格にとり、対象の着点(結果)がニ格によって明示的に表されている。

(16) 別荘を病院に変える。

(17) 日本語を英語に訳す。

(18) 彼女はコーヒーを煙草に換えた。(「美しき」上)

(19) 髪のかたちを自分で派手なものに直した。(「美しき」下)

これらの例から分かるように意味的に対象の改変過程に視点があるように思われる。これはA類の生産活動の動詞と一番大きな違いと

言えよう。この種の動詞には引用表現と境界線を引くことができないものがある。「改める、変える、治す、訂正する」などの動詞である。例えば

(20) 広報部は死傷者を37人から31人に／と訂正した。

の例では二格が内容を表す同一的なト格に置換可能である。この「とする」は引用のト格に連続している。⁵

なお、変化のもとの様子が必須補語に近い成分としてカラ格で要求される。例えば例文(20)ではもとの様子(人数)「37人から」が抜けると意味的不充分さが感じられてしまうのである。

ではC類の検討に入る。C類は社会的状態や地位の変化を表す表現である。二格の名詞の機能は働きかけをうけてヲ格の名詞で示される、人間に備わった社会的な状態位置を表現している。この二格は先述した模様がえ表現を広げて、結果=対象の二格の展開したものである。

(21) この宋氏を李登輝が党秘書長に抜擢した。

(22) 彼女を偽装した事実の証人に仕立てた。(「美しき」下)

変化他動詞文ではヲ格名詞と二格名詞の順序を普通入れ換えられないが⁶、このタイプの表現では下例のようにヲ格名詞と二格名詞の順序を入れかえられるものがある。

(23) 書記長代理にきみを選んだ。

なお「選ぶ、起用する、抜擢する、雇う」のような主に資格や身分の変化を表す動詞の場合は、その動詞が持つ意味上の特徴によって、結果補語二格を「として」に入れ換えても意味としては大きな違いはない。

3. 1. 3 構文的特徴

⁵用例は森山(1988)から借用したもの。

⁶変化他動詞と補語の結び付きの順序について次節で詳しく触れる。

ここまでの考察に基づいて、以下のような構文的特徴が観察できる。

3. 1. 3. 1 格支配の変化

変化他動詞には、結合の主要素になる動詞が独立した本来の意味を保っているながら、結びつきの名詞句の違いによって動詞が要求する格支配が変わるものが多い。「選ぶ」を例に見てみよう。

(24) バッターは2球ボールを選んだ。「基本」

(25) 私たちは年長者の中から代表を選んだ。「基本」

(26) 親が息子に嫁を選んだ。「基本」

(27) 委員たちは加藤氏を次期委員長に選んだ。「基本」

(24)、(25)、(26)、(27)における「選ぶ」の基本的意味そのものはあまり違わないが、ヲ格に来る名詞の違い(24)では「ボール」、(25)では「代表」、(26)では「嫁」、(27)では「加藤氏」)のような名詞が来ることによって、「選ぶ」の取る格体制が異なっている。(25)ではヲ格に「代表」のような名詞が来ることによって(24)には存在しない具体的な物や個人ではない、ある範囲(起点)を示すカラ格が要求される。「選ぶ」も〔Nガ(仕手)カラ(起点)ヲ(対象=着点)〕といった格体制を取ることになり、「見つけ出す」といったニュアンスを帯びることになる。同じように(26)ではヲ格に「嫁」のような名詞が来ることによって〔ニ(受け手)〕を表すニ格の必要が高まり〔Nガ(仕手)Nニ(受け手)Nヲ(対象)〕といった格体制を取ることになり、「選ぶ」は“選択する”というニュアンスを帯びることになる。そして(27)では「加藤氏」のような名詞が来ることによって結果=着点を表すニ格の必要度が高まり〔Nガ(仕手)Nヲ(対象=起点)Nニ(結果=着点)〕といった格体制をとることになり、「選ぶ」は選り分けて決める、つまり、“選定する”のニュアンスを帯びるようになる。「選ぶ」の格支配と、とる格体制を整理してみると次のようになる。

格支配

格体制

- ① 選ぶ [ガ、ヲ] [N ガ (仕手) ヲ (対象)]
 ② 選ぶ [ガ、カラ、ヲ] [N ガ (仕手) カラ (起点) ヲ (着点 = 対象)]
 ③ 選ぶ [ガ、ニ、ヲ] [N ガ (仕手) ニ (受け手) ヲ (対象)]
 ④ 選ぶ [ガ、ヲ、ニ] [N ガ (仕手) ヲ (対象 = 起点) ニ (結果 = 着点)]

このような格支配の変化というのは変化他動詞全般について言えることである。

3. 1. 3. 2 動詞と必須補語の結びつきの順序

変化他動詞文のもう一つの構文的特徴は文中における対象 = 起点のヲ格と結果 = 着点のニ格の順序が普通入れかえられないということである。これは変化他動詞のもっている意味的特徴、すなわち、“仕手が対象に働きかけ、あるいは作用して、その結果、対象がある状態、性質を帯びるようになる”という意味構造によるものだと考えられる。そのゆえ、動詞と必須補語との結合の順序が固定してしまうことになる。下の例を見てみよう。

- ⑤ ? 米を炊く ⑤' 米を飯に炊く
 ⑥ ? 雪景色を詠む ⑥' 雪景色を俳句に詠む
 ⑦ ? 彼女を仕立てた ⑦' 彼女を偽装した事実の証人に仕立てた

⑤'、⑥'、⑦'の「炊く、詠む、仕立てる」は [N ガ N ヲ N ニ] といった格体制を取っているが、ガ格、ヲ格、ニ格が同じようにそれぞれの動詞と結びついて同等に機能しているわけではない。[N ガ N ヲ] の格体制を取る「炊く、詠む、仕立てる」と異なって、この場合は上の例から分かるように、対象ヲ格と動詞との結びつきは間接的である。結果 = 着点のニ格と動詞がまず結びつき、そして、それによって語義がまず具体化、限定化する。そして、その具体化、限定化した語義全体に対してヲ格が結び付いている。ヲ格の存在は

ニ格の存在を前提にしている。その事は表層の表現形式にニ格を持たない⑤⑥⑦の文がそのままでは使えないということからも分かる。

7

3. 2 「スル」を述語動詞にとる変化他動詞文

文型

(i) X ガ Y ヲ Z (名詞) ニスル

(ii) X ガ Y ヲ Z (連用語) スル

「スル」は日本語の基本的な動詞として使用頻度が高いが、「スル」の用法は非常に多岐に渡り、その用法を数えあげて、分類整理するだけでも容易ではない。本節では対象の変化後の結果状態を必須成分として要求する他動詞として用いられる「スル」と、その構文だけを取りあげて考察する。以下 (i) (ii) の順に例文に基づいて、それぞれの構文の意味、用法と語用的条件を考える。

(i) X ガ Y ヲ Z ニスル

(28) 原稿のことは確かにわたしが尾村さんの気持ちを考えてお金をにしたね。(「美しき」下)

(29) 大学のもう一つの使命は(文化)遺産相続人を育てるとともに遺産をさらに豊かなものにしていくことにあります。(「東大生」)

(30) 今度は石川という有名なオランダ医学の先生に教えてもらおうと思いましたが、しかし、諭吉のような青年を弟子にしてくれません。(「福沢」)

(31) 自然環境の保護とか福祉社会とか経済価値を減らし怠け者をつくり出し、日本を先進国病にする。(「豊かさ」)

(32) 交通手段の発達が人間を「動く人」(homomovers) にした。

上の例から分かるように、この文型は前節で取りあげたものと格

⁷仁田(1989)を参照

体制としてはよく似ている。前節の考察で“XガYヲZニV(スル以外の他動詞)”においては、仕手(X)が対象(Y)に働きかけ、作用して、その結果、対象がある状態あるいは社会的地位、身分を帯びるようになるということが意味的にも、形態的にも全面的に具現化されているという特徴を持っていることが分かった。一方、この「スル」による変化他動詞文は、「スル」自体は変化の性質を示唆するような形態素はないので、それが故に「仕手」を表すガ格と対象のヲ格があるだけでは、完全な表現にならず、同時に二格の名詞句を必須成分として前接して用いる必要がある。⁸ 独自では具体的な意味を持たない、抽象性に富んだこの「スル」は色々な名詞句と結びついて広範囲にわたる意味を表す。また主語に来る主体の意志性にも制限がないのが特徴である。勿論主体の意志性の有無により、文が表す意味と文法的性質の請け負う領域に違いが生じてくる。例えば例(28)、(30)ではガ格に来るのは有情物であるから<仕手、動作主>であるのに対して、(31)、(32)では無情物であるから<原因>になる。

一方、下例に示されるように

(33) 自分は仮装行列での一位や扉のない便所を軽く見てはならない、あの屈辱をこれからの人生航路の推進力にしなければならぬ。(「日蝕」)

(34) 高志はそれを母と自分に対する心の債務にしたのである。(「日蝕」)

変化表現と認識表現とは連続していて、境界線を引くことが難しいような例がこの構文形式にはよくある。(33)、(34)はともに「仕手」が対象に働きかけるとき、対象に意義を見つけ、意義づけを行うという意味特徴をもっている。すなわち、この二つの文では

⁸ 形態論的には動詞そのものに変化状態の性質を示すための形態素をもって、そのため、統語論的に「仕手」を表すガ格と「対象」を表すヲ格があるだけで十分に状態変化の事態を表すことができる一連の動詞がある。「強める、曲げる、広げる、減少する、拡大する、縮める、縮小する……」などがそれである。

動詞「スル」がニ格と組み合わさって、それが意義づけあるいは認識作用をしめし、ヲ格の名詞は意義づけ、認識作用をうける対象ともとらえられるわけである。

なお、「ものにする」、「看板にする」、「力にする」、「反古にする」…などのように一単語にひとしくなっているものが多くある。この慣用的な用法についてはここでは深入りせず、その考察は別の稿に譲る。

(ii) XガYヲZ(連用語)スル

(35) しかし、道徳も倫理もなく富もなく、富や金のためにはなにをしてもいいというあさましさは同じように短期間に「富」をつくり出し、国を「豊か」にし、国民を幸福にしたと思われてきた。(「とんでもない」)

(36) そういう狭い視野からの議論だけで教育の全体構造をガチャガチャにしてしまった。(「東大生」)

(37) これが女性の意識を古いままにしている大きな要因であることをあらためて指摘しておきたい。(「とんでもない」)

(38) 末広部長とか金森次長とか部から消えたのは部の空気を明るくしたとは言える。(「美しき」上)

(39) グループ活動は便利だった。時間を使うし学生たちを忙しくしておけるからだ。(「東大生」)

この種の構文の特徴は、結果を表すZには名詞ではなく、形容詞(38.39)、形容動詞(35)の連用形や副詞(36.37)を用いられることである。統語論的にはこの「連用語+スル」の述語句の組み合わせがヲ格を支配して、対象のヲ格に対する働きかけを表す、他動詞化したものと見てもさしつかえはなかろう。

ところで様態変化を生起させる「仕手」と様態の持ち主ということに注目してみると、両者の異なる関係によって意味に変化が

生じることに気がつく。まず例(35)～(39)の文に示されているように、主体と様態の持ち主が一致しない場合の様態は変化後の結果の状態である。一方、(40)～(42)のように、主体と様態の持ち主が一致する場合の様態は変化後の様態の意味が薄く、ただその場における主体の様態を表すという違いがある。

(40) あがり性の弟はいつも顔を赤くしている。

(41) 妹はいつも髪をきれいにしている。

(42) 大理石の柱はどれも中央部に膨らみを持たせ、上部を細くした円柱形である。(「上級」)

(43) 夫の前では彼女話し方を静かにする。

(43)の文では「話し方を静かにする」はいつもの静かでない(やかましいとか)話し方を静かな話し方に変えるという意味以外に、その場における「話し方」のような主体の特定の行為の様態であるともとらえられると思う。

なお、連用語に「名詞+動詞連用形」の形式を取る表現がある。
例えば

豆腐をたんざく切りにする

玄関に車を横づけにする

泥棒を雁字搦めにする

波線をひいた部分を分解すると、「たんざく切り」なら、「たんざく(の形)に切る」、「横づけ」なら、「乗り物の側面を玄関に接するようにつける」、「雁字搦め」なら、「縄などを左右から交差してぐるぐる巻きにからめる」ということになる。このように「～切り」、「～づけ」、「～がらめ」という複合語で、「～」の部分が結果状態を表す。そのため、複合語全体も状態を表すことになる。こういった「～ヲ名詞+動詞連用形ニスル」のような表現形式のものもこのタイプの変化文に入れていいと考える。

3. 3Xガ〔補文〕ヨウニスル

(44) このアパート中の人にみんないってやるわ。ここにいられな

いようにしてやるわ。（「美しき」上）

- (45) 油をさして、ドアがスムーズに開くようにした。（「日本語文法ハンドブックからの借例」）
- (46) そこで店が用意したコースメニューを自分なりに改編して独自のコースメニューを作れるようにしておいてやるべきだと思います。（「東大生」）
- (47) 資本家や政治家は労働時間の短縮と可能な限りの自由時間を人々が持てるようにすることがよりよく生きることへの解放の道だと述べている。（「豊かさ」）
- (48) また「センター利用のしおり」にはこのセンターは経済的理由で、施設を利用できない人がいないようにすると書いてある。

この構文の中の「～ヨウニ」についての扱いは様々である。例えば、橋本進吉の助動詞説、時枝誠記の形式名詞説、奥津敬一郎の形式副詞説⁹、柴谷方良の副詞節説などがある。¹⁰

諸説を一々再吟味することはできないが、ここでは「～ようにする」の構文的特徴とその意味用法について考えることにする。

前節で考察した三種類の構文は「仕手が意志的な働きかけによって対象の属性を別の属性、状態へ変化させる」という構文的また意味的特徴を持っている。これらの変化他動詞文とは対照的に、このタイプの他動詞変化文は形態上、補文の叙述内容の事柄を「ヨウ」によっていったん全体的に捉えなおした上で、「～ニスル」によって事柄をある別の状態（文に明示化する場合もあるし、明示化しない場合もある）から補文が表す状態に変えるように働きかけるという意味を表すという違いがある。例えば(44)では「あなたがここにいられる」状態を「ここにいられない」という状態に変えるために何

⁹奥津（1978）ではこのヨウニの機能について「殆ど無意味でただ動詞文を変化文の結果語とするために、つけられた補文化辞（complementizer）」とする。

¹⁰蘇（2002a）を参照

らかの働きかけ（アパート中の人みんなに言うなど）をしたことを表す。そして(45)では「スムーズに開く」という状態になかったドアを「スムーズに開く」という状態に変えるために働きかけ（油をさすなど）をしたことを表す。

また例(44)～(48)に示されているように、「ヨウニスル」の前に来る出来事は無意志的なものである。(49)のように意志的なものが来ると「習慣的にある行動をする」ことを表す用法になる。

(49) 私は毎日野菜と果物を食べるようにした。

このタイプの構文にはもう一つの用法がある。

(50) 平成大不況を克服するためには、人々がものを買うようにしないといけないと、経済人たちは言っている。（「豊かさ」）
これは前接動詞で表される出来事が実現するように努力するという意味を表す用法である。¹¹

4. 結論

以上変化他動詞文の四つの文型を取りあげ、対象と結果の意味役割の対立、格支配、文型変換と語義とのかかわりの問題点に焦点をあて、用例の観察に基づいて考察を行った。変化他動詞文における必須補語の名詞の格には意味役割と形という二つの側面があり、その格の意味と形式が一対一に対応していないことが検証できた。そして変化他動詞の持っている意味特徴により、ヲ格名詞とニ格名詞の順序が固定していて、普通、入れかえられないことも明らかになった。なお「XガYヲZ（連用語）スル」形式の変化他動詞文では「仕手」が「様態」の持ち主であるか否かによって文全体の意味が変わるということも分かった。また「Xガ〔補文〕ヨウニスル」形式の構文は他の三つの変化他動詞文と違って、「仕手」が補文が表す状態に変えるように働きかけるという意味特徴を持っていることも解明できた。さらに「スル」による変化他動詞文は“引用表現”や

¹¹以上の二つの用法は本稿の考察対象ではないからこれ以上触れないことにする。

“認識表現”、“意義づけ表現”などと境界線を引くことが困難で、連続しているところがあることも判明した。

本稿の考察を通して、諸説に見られる必須成分の設定や概念の導入は考察対象となる他動詞変化表現の種々の構文の用法や意味特徴を分析する時の手がかりとして極めて示唆的であることを明らかにできた。しかし、必須補語、準必須補語、副次的補語の設定に関してはまだ様々な問題が存在していることも否めない。こういった問題や今回紙幅の都合で考察できなかった他の他動詞変化表現は今後の研究課題とする。

参考文献

1. 安達太郎、「「する」の文型と構文」、『広島女子大学国際文化学部紀要』（2000）、第7号。
2. 天野みどり、「状態変化主体の他動詞」、『動詞の自他』（須賀一好他編、ひつじ書房、1995）。
3. 早津恵美子、「有対他動詞と無対他動詞の違いについて」、『動詞の自他』（1995）。
4. 庵功雄他編『日本語文法ハンドブック』、スリーエーネットワーク、2000。
5. 益岡隆志、『命題の文法』、くろしお出版、1986。
6. 奥田靖雄、「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」、『日本語文法連語論（資料編）』（言語学研究会編、むぎ書房刊、1983）。
7. 奥田靖雄、「に格の名詞と動詞とのくみあわせ」『日本語文法連語論（資料編）』（言語学研究会編、むぎ書房刊、1983）。
8. 奥津敬一郎、「変化動詞文における形容詞移動」、『副用語の研究』（明治書院、1983）。
9. 奥津敬一郎、『「ボクハウナギダ」の文法』第8版（増補）、くろしお出版、1977。
10. 影山太郎、『動詞意味論』、くろしお出版、1996。

11. 影山太郎、『ケジメのない日本語』、岩波書店、2002。
12. 小泉保他編、『日本語基本動詞用法辞典』、大修館書店、1989。
13. 城田俊、「文法格と副詞格」、『日本語の格をめぐる』、(くろしお出版、1993)。
14. 蘇文郎、「現代日本語の引用表現についての一考察」、『東呉日本語教育学報』、(1997) 20 期。
15. 蘇文郎、「変化表現についての一考察」、『東呉日本語教育学報』、(2001) 24 期。
16. 蘇文郎、「変化表現 (II) — 「～ことになる」「～ようになる」及びモダリティー形式化した「なる」を中心に—」、『蔡茂豊教授古稀記念論集』、(2002a)。
17. 蘇文郎、「翻訳を通して見た日中両語における変化表現の対応関係」、『東呉日本語教育学報』、(2002b) 25 期。
18. 蘇文郎、「変化表現 “～化する” を中心に」、『日語教育学国際会議論文集』、(東呉大学、2002c)。
19. 寺村秀夫、『日本語のシンタクスト意味 I』、くろしお出版、1982。
20. 仁田義雄、「結果の副詞とその周辺」、『副用語の研究』、(渡辺実編、明治書院、1983)。
21. 仁田義雄、「拡大語彙論的統語論」、『日本語学の新展開』、(くろしお出版、1989)。
22. 仁田義雄他、『文の骨格』、岩波書店、2000。
23. 仁田義雄、『副詞的表現の諸相』、くろしお出版、2002。
24. 宮島達夫、『動詞の意味用法の記述的研究』、秀英出版、1972。
25. 森田良行、『日本語文法の発想』、ひつじ書房、2002。
26. 森山卓郎、『日本語の動詞述語文の研究』、明治書院、1988。
27. 矢澤真人、「副詞句と名詞句との意味関連をめぐる」、『国文学解釈と鑑賞』、(至文堂、1993) 58。

用例出典

1. 「東大生」：『東大生はバカになったか』、文芸春秋。
2. 「日蝕」：森村誠一、『日蝕の断層』、角川文庫。
3. 「翳った」：松本清張、『翳った旋舞』、角川文庫。
4. 「美しき」上：松本清張、『美しき闘争上』、角川文庫。
5. 「美しき」下：松本清張、『美しき闘争下』、角川文庫。
6. 「とんでもない」：マークス寿子、『とんでもない母親と情ない男
の国日本』、草思社。
7. 「豊かさ」：暉峻淑子、『豊かさとは何か』、岩波書店。
8. 「恐る」：ピーターサックス著、後藤将之〔訳〕、『恐るべきお子さま
大学生たち』、草思社。
9. 「基本」：『日本語基本動詞用法辞典』、大修館。
10. 「福沢」：『福沢諭吉』、建宏出版社。
11. 「上級」：『上級で学ぶ日本語』、宇田出版。